

プロメテウスの罫

1475

土よ 13

年寄りの尊厳

福島県飯館村で農業復活の道を探る菅野宗夫(64)ら「ふくしま再生の会」は、田んぼの土や稲の放射能測定を東大の施設に頼んでいる。準備作業を取りまどめる農学部の非常勤職員齋藤真子(67)は、はじめのうち活動を遠目に見ていた。だが、その考えは変わっていく。2011年12月。

再生の会の活動報告会。東京・新宿の工学院大学の教室に約60人が集まった。報告会の終盤、菅野が黒板の前で話し終ったところで、妻の千恵子(63)が突然言った。「すみません、一言いいますか」千恵子は教室の一番後ろにいたが、声を通るからとマイクを使わず一気に入話した。

「目にも光がない。顔は真っ白。飯館のおじいちゃん、おばあちゃん、真っ白な顔でなかった」「太陽の下で働いて、自然の中で生活がありました。80歳過ぎて、90になって、ダメだって人生はないでしょう。それが一番悔しいです」「どういふ言葉で伝えていいかわからないです。ただ、一人の人間として、尊敬するという言葉、頭に入れてほしいと思います」



菅野宗夫さんと千恵子さん

約10分間、思いをぶつけるように話したのは、村で土を耕して生きてきたお年寄りのことだった。慣れた山で山菜やキノコを探るこ

とも、野菜をつわって食べてもらうこともできず、狭く壁の薄い仮設住宅で小さく生きて過ごしている。そのことへの怒りがじんだ。さらに、半年後の報告会。こんなには別々に避難する孫たちへの思いを話し、こう訴えた。「家畜、空気、山、花、全部含んだ家族なんです。どうぞいらしてください。見てほしい」

「戻る人も戻らない人も、飯館をどうしようという気持ちには変わらぬ。ただ強制はだめだ。もともと集まって、話すべきだと思っただけだ。」「周囲の人の意見はほらほらで、いろんなことを言う人がいます。どう乗り越えて前に進んでいますか」菅野は、自分の活動も最初は理解されなかったものの、一緒に活動するメンバーと地区の会合で説明していくうちに、受け入れられるようになってきたことを話した。

プロメテウスの罫

1476

土よ 14

祖父の心が見えた

ボランティアと農地の除染実験などに取り組む福島県飯館村の菅野宗夫(64)。その自宅には、学生や留学生たちがよく見学に訪れる。今年9月初めにはフェリス学院大学(横浜)の学生ら6人がきた。震災直後の様子や現状を菅野から聞いた後、村内を車でまわった。村役場や無人の小学校、汚染土などを入れた黒い袋が山積み

ぼ。空間線量も測った。翌日、学生たちは掘りかたつを囲んで菅野の話聞いた。その一人、4年の清水葉月(22)は飯館村に接する浪江町の出身。自宅も避難指示区域にある。福島第一原発の事故が起きるまで祖父父母と両親、きょうだいの7人暮らしだった。毎年5月の連休は家族総出の田植

え。暑いし、きつかったが、畦に座って休憩する時間が楽しかった。うちのコメ、甘くて、すごくおいしかった。今になって思う。清水の祖父もまた、避難先の南相馬市から毎日のように浪江の家に帰り、いつか農業を再開する日のために、除染した田んぼを耕している。その姿が菅野と重なった。地道すぎて、途方もないことだと思っ



清水葉月さん(左)たち

た祖父の行動が、理解できた。「農家にとって、農業は仕事じゃなくて喜び。自然や土地をすぐ大切にする。祖父は、きれいにし

て残そうと考えると思う」「清水自身は原発事故後、千葉県に避難し、高校を転校した。どう見られるのか気になって、福島県出身とかなかなか言えなかった。一方で、地元の友人とも震災のこととは話しづらかった。賠償や、町に帰るか帰らないか、置かれている状況や思いが一人ひとり違う。飯館へ行くことと思っただけは、浪江はどう復興していけばいいのか、考えたかったからだ。清水は菅野に思い切った聞いた。「周りの人の意見はほらほらで、

飯館から避難した人が「早起きて何もやることがない、それが一番苦しい」と言っていたのを思い出した。相対して思う。今年「再生の会」の報告会のチラシを店にはると、通りすがりの人が「福島のコメは売ってますか」と入ってきた。また扱おうと決めた。若い頃は生産者を訪ね、草取りを手伝い、稲の香りをかき、周りの風景を見た。だからこそ、お客さんに納めたいと思った。飯館にも絶対行く。宗夫たちに中島は約束した。(菅野有希子)

プロメテウスの罫

1477

土よ 15

米糠の香りがいい

10月15日。福島県飯館村で農業の復活に取り組む菅野宗夫(64)は、農家仲間菅野永徳(76)と東京・阿佐谷にいた。阿佐谷には宗夫や永徳が参加する「ふくしま再生の会」の事務局がある。アパートの一室を借りて、2人は、その部屋の大家、中島哲(69)が営む米穀店を訪ねた。永徳は、東京の人の多さに疲れ、

口数が少なくなっていた。ところが中島の店に入るなり目を輝かせた。「この香りがいい。米糠のね」昔ながらの精米機が今も使われていることがうれしかった。高き33センチもある精米機は中島の親の時代から使っている。木の柱の中を通るベルトコンベヤーで玄米を運び、精米を7、8回繰り返す。「コメコメハひつてのは、急いじゃ

だめなんだよな」と、中島。最新の精米機より時間も手間もかかるが、うまみを損なわない。「また福島のコメを置くことになりました。まず会津産からね」中島は10年以上前から会津地域にある喜多方市のコメを扱ってきた。農家が飛び込みで営業に来たのがきっかけだ。当時は珍しい、生産者の写真入り米袋を持っていた。それ



左から永徳さん、宗夫さん、中島さん

だけ味に自信があったのだ。菅野「本並にこんなことがなきゃねえ」福島第一原発の事故後も、生産者が放射性物質の検査について記した

チラシを配り、売りが続けた。当初は客も買ってくれてはいた。だが、2011年10月に福島県が「安全宣言」を出した後、放射性セシウムの上限を超えるコメが見つかる。翌年から、上限の値そのものが引き下げられた。「なるべく福島から遠く離れた所のコメがほしい」と客に言われ、島根県産が売れるようになった。徐々に福島との取引から手をひいた。ところが、持ち家の一室を「再生の会」に貸すことになる。会が飯館で活動するに聞いて心が動いた。

飯館から避難した人が「早起きて何もやることがない、それが一番苦しい」と言っていたのを思い出した。相対して思う。今年「再生の会」の報告会のチラシを店にはると、通りすがりの人が「福島のコメは売ってますか」と入ってきた。また扱おうと決めた。若い頃は生産者を訪ね、草取りを手伝い、稲の香りをかき、周りの風景を見た。だからこそ、お客さんに納めたいと思った。飯館にも絶対行く。宗夫たちに中島は約束した。(菅野有希子)